EP :VRMO

新野 祝斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＥＰ　：ＶＲＭＯ

【Ｎコード】

Ｎ０６２２Ｙ

【作者名】

新野　祝斗

【あらすじ】

未知への好奇心と、痛い野望を胸に、ＶＲＭＯの世界を主人公が仲間達と冒険する。

発売当日

今日、リリースされた『エクスプローラ・オブ・プラネット・VRMO』通称EP。
うっかり予約をしそこなった新留強力（にいどめきょうりょく）はそれを手に入れるべく、いつもと比べてかなり早起きをした。
雲が少ない晴れ空に浮かぶ太陽も、まだ地平線の下に体の半分近くを埋めている。

お店に向かう前にまずは身支度だ。洗面所に行き、顔を洗って目を覚ます。
その次はシャワー。昨日の夜にもお風呂に入ってはいるが、念のために朝も寝癖の先から足と爪の間までしっかりと洗った。

しかし、ここで思わぬ落とし穴が待っていた。
「しまった……」
シャワーからあがった新留は服を用意していなかった。さすがに洗濯機に放り込んだ服を着る気にはなれない。
なので、バスタオルを女性のように胸の上まで巻いて隠し、急いで自室へ駆け込んだ。
さいわいにも脱衣所兼洗面所から新留の自室までは徒歩数歩で、朝も早かったので見つかることはなかった。

その姿のまま部屋に備え付けてあるクローゼットから、なるべく動きやすくて寒くない服を探す。
少し考え込んだけれど最終的に新留はシャツの上にジャケットを羽織り、下は黒のジーンズというシンプルで無難な格好を選んだ。

それから朝飯、トイレも済ませ、最後に財布の中身の確認。

ようやく準備万端となった新留は親にばれないようにこっそりと家を出た。
――これで、いつもとは違う自分になれる。

黒い大蛇。そう例えざるをえないほど長い行列がお店の前にできていた。
太陽が丸くなったとはいえ、冬も近く少し肌寒い日な上にまだ開店三時間前。なのに百人近くの人が並んでいる。
ただ驚きはしなかった。なぜならＥＰは世界初の画期的なシステムが搭載されているからだ。
その秘密はタイトルにも隠されている。
ＶＲＭＯ。これはバーチャ――

「なぁ、お前らを倒せば早く『エクスプローラ・オブ・プラネット・ＶＲＭＯ』が手に入るのか？」
列に並んだ途端、背後から穏やかじゃない質問をされた。
驚いて振り返ると、そこにいたのは小学生ぐらいの少年だった。

身長は新留の百七十センチを基準にすると百四十前後ぐらいで、かなり小さい。
加えて短髪にちょっと日に焼けた肌、それに黄緑のパーカーに黒のハーフパンツ。
新留が想像する典型的な少年そのものだった。

――まだ倫理観が完成してない少年だ。俺がちゃんと教えてやらないとな。
そう考えた新留は頭の高さをあわせるために腰を降ろす。
そして諭すように優しく語りかけた。

「ここはまだバーチャルリアリティの世界じゃない。リアルだ」
そう、まだゲームの世界には入っていない。
「だから暴力はいけな――」
「あんた、後ろ割り込まれたよ」
「え？」
たしかに見覚えのない、さっきまで確実にいなかった、男が素知らぬ顔で並んでいた。
最初から個々に並んでいましたよオーラを存分に出している。

普段の新留なら泣き寝入りをしただろう。
ただ、今は後ろに無垢な少年がいる。彼にこれが正しい行いだと思わせてしまってはいけない。
そんな正義感に駆られ、新留は男の肩を叩いた。
……無視。
わざとらしく携帯を凝視している。あくまでシラをきり通すつもりだ。
何度もしつこく肩を叩いて声をかけてみても反応しなかった。

「まどろっこしいよ」
新留の不甲斐なさにため息をついた少年が動いた。
低い位置から膝の裏を蹴っとばして相手の膝をくの字にする。
少年はその場で勢いよく一回転し、そこから今度はお尻をおもいっきり蹴った。
いくらガタイがよくても足を崩された状態ではひとたまりもない。
あっけなく列から押し出された。

でも、それで終わりではなかった。
「あぁにすんだぁがきぃ？」
追い出され少し顔を赤くした男は頭が悪そうな口ぶりで文句を言

う。
「だいたぁなぁ、よこはいりぃはまなぁいはんだぞぉおらぁ」
「なに言ってるかわかんない。出直してきな」
「てめゃあ！」
ついに男がブチ切れた。少年の頭めがけて短くて太い腕を伸ばす。
――頭か髪を掴むつもりだ！
新留は少年を助けるため、ある行動に出る。
「おまわりさんこっちです！」
遠くに見えた警官に大声で呼びかけた。
それがしっかり届いたのか、警官は大急ぎで自転車をこぎだした。
来るまでに、その男は逃げてしまったものの、ニールはなんとか少年を守ることに成功した。
「お兄さん見た目どおりヘタレだね」
自身のプライドにはヒビが入ったが。

その後、無事に列に戻り――前に並んでいて一連の流れを知っている人の証言と警察官の口ぞえのおかげ――無事にＥＰを買えた。
予想よりも大きな箱だったので持って帰るのが大変だけれど、精密機械なので落とすわけにはいかない。
移動はゆっくり、電車の中では大事に抱えた。
自宅のマンションについてからも気は抜けない。エントランスを抜け、エレベーターに乗り、七つあるボタンから五つ目を選ぶ。
そして玄関で鍵を開け、そっと中に入り、母親にばれないように自室に移動する。
部屋のパイプベッドに腰を下ろしたところで、ようやく一息をつ

けた。
ベッドの他には勉強机とパソコンぐらいしかない殺風景な部屋に置かれた大きな箱を新留は満足げに眺める。
でも、一休みはそれまで。本番はこれからだ。新留は先にパソコンの電源ボタンを押した。
それから箱に手をつける。中身を傷つけないように慎重に慎重に。

五分後、中からヘルメットのようなものと白いＵＳＢメモリが出てきた。
あとは大量の保護用の空気の入ったビニールだけど、それはどうでもよかった。
ヘルメットは黒くてメタリックな鈍い光を放っているが軽い。大きさは店頭で自分のサイズを選んできたのでピッタリだ。
新留はＵＳＢメモリを起動したパソコンに差し込み、それからヘルメットを被った。

新留の視界は完全な暗闇に包まれる。でもなぜか自分の体だけは鮮明に見えた。
まるで重力と足場のある宇宙に突っ立っているようだ。
けれどすぐに変化が訪れる。

『エクスプローラ・オブ・プラネット・ＶＲＭＯへようこそ！』

突如、手が届くぐらいの位置に大きな黄色い文字が浮かび上がってきた。
しかしそれで終わり。他にはなにも起こらないまま、黄色い文字が浮かび上がっているだけ。
――起動に失敗した？　……あ。
新留は“。”の後に、頂点を下向きにした黄色い三角が点滅していることに気付いた。

恐る恐る手を伸ばしてみる。緊張と興奮から少し震える手が三角に触れた。
触った感触はなくても三角は消えて、別の文字が浮かび上がってきた。
『脳波データパターンを記憶しました。このＥＰヘッドピースはお客様しか使えません』
また出てきた三角を押すと五十音の入力画面が出てくる。
『お名前を教えてください』

――名前か。本名はありえないとして……そうだ、昔のあだ名にしよう。これならすぐに適応できる。
新留はカナモードにしてニールと打ち込む。
このあだ名、小学生の頃に転校した先で新留を間違えて覚えられて定着したものだ。
――とは言ってもニールから新留とはさすがに連想できないだろう。
そう考えたニールは迷うことなくＯＫボタンを押した。

『ニール様、ようこそ。キャラクターの種族をお選びください』

・キャバリエ
・ブリィガンド
・オラクル

名前だけじゃわからなかったので、とりあえず一番下のオラクルを触ってみた。

・オラクル
神秘的なミステリックと呼ばれる呪文を駆使し、戦闘や支援をす

る神官。
ハンターやブリィガンドが使えないミステリックが使える唯一の職業。
ミステリックには様々な効果があり、万能。ただし発動の際に硬直時間がある。
体力と防御力が低い。神秘耐性は高いが体力の低さで相殺されて普通。
クセが強いので上級者向け。

「上級者向けか。たしかに神官は難しそうだ」
次はブリィガンド。

・ブリィガンド
影から敵を撃ち、どんな鍵も開けることができる盗賊。
ハンターやオラクルだけでは手に入れられないアイテムを入手できる職業。
遠距離攻撃が得意だが攻撃力は低い。命中はかなり高い。
体力は低く、物理神秘の両方に打たれ弱い。
攻撃を受けるとほぼ即死なので上級者向け。

「ん、盗賊も扱いが難しいのか……」
最後にキャバリエ。

・キャバリエ
手にした武器で敵をなぎ倒し、味方を護る騎士。
ブリィガンドやオラクルでは装備できない武器や防具を全て装備できる職業。
近距離攻撃が得意で攻撃力も高い。命中に難あり。
やや神秘耐性が低いが、高い体力でそれをカバーしている。
手数はプレイヤー任せなので上級者向け。

「全部上級者向けかよ！」
ツッコミの勢いで決定を触ってしまい、職業はキャバリエで確定してしまった。
ただ、不満はなかったので先に進む。
『どのモードで遊びますか？』

三角を押すと二つの選択肢が現れた。
・オンラインストーリーモード
・オンラインマルチモード

今度は少し迷ってからマルチモードのほうを選択した。
すると、今度は『部屋をお選びください』といくつもの名前が書かれたウインドウが現れた。

――これが部屋なのか。新規部屋作成もあるな。
名前は赤と青で色分けされている。性別で……というわけではなさそうだ。
赤色で『鈴木孝太』と記されているのを見て、新留は考えなおした。
――なにはともあれ部屋を選ばないと。

名前の上には白文字で部屋名らしきものが書かれている。新留はそれを頼りにして、手ごろな部屋を見つけた。
ただ、手が伸びない。初めてのオンラインゲームで緊張していて、なかなか飛び込めなかった。
そうしている間にも、その部屋に次々と人が集まっていく。
ついに青四人赤四人の計八人が集まってしまい、ウインドウの一覧から消えた。

それからも何度かいい部屋を見つけたがダメだった。
新留は自分から入ることは諦めて、部屋を作ることにした。
端にあった新規ボタンを押す。すると行き先を尋ねられたので選択肢から選ぶ。
とは言っても最初なので一箇所しか選べなかった。次に部屋名を書くよう求められた。
『あああああ』
適当すぎる部屋名を打ち込んだ後、三角を押すと空間が光に包まれた。
眩しさのあまり、思わず目をつぶってしまう。

少しして、まぶたの裏からも感じていた眩しさがおさまる。
そっと目を開けると、新留は真っ白でざらざらなタイルが一面に張られた通路に立っていた。
――よし、完全攻略してやる！
新留は自分の輝かしい未来の姿を想像し、行動に移った。

初戦闘

真っ白な通路にいる新留、いやニールは自分の置かれている状況を確認していた。

通路の幅は横一列に並んだ大人三人が手を広げられるぐらいなこと。周囲を見回し敵影がないこと。

右手はいつの間にか刃渡り十二センチほどの短剣を握っていること。防具は腰に付いている謎の物体だけなこと。

そして後ろを振り返ったら自分の部屋の天井がウインドウに写し出されていることを。

そう、ニールのいるこの場所は現実にある世界ではない。

ＶＲ――バーチャルリアリティ、つまり仮想現実だ。電脳空間の一種と言ってもいい。

なので、ここではいくら暴れても迷惑がかからない。現実でも体が動いたりはしない。

ただ、現実で緊急事態が発生した場合に対処できないと命に関わるので、後ろを振り向けば部屋の中が見えるようになっている。音もちゃんと届く。

もちろんプライバシーがあるので、他のプレイヤーには見えないし聞こえないようになっていた。

――天井が映っているってことはこっちに来た後に倒れたんだろうな。

ベッドで寝転がってからヘルメットを被るべきだった。

無様に床に横たわる自分の姿を想像して、ちょっと後悔を抱きつつ、確認を終えたニールは通路を進んでみることにした。

カツンカツンと足音を響かせながら静かで真っ白な通路を少し歩

くと、通路と同じで真っ白な機械仕掛けの扉が現れた。
しかし近づいても開かない。機械仕掛けの扉は施錠されていた。
その横にはディスプレイ、そして一から九までの数字と開と消と書かれた計十一個のボタンが設置されていた。

――電卓のようなこれはキーロックだな。となると、ブリ……盗賊が必要？　入ってくるのを待つか？

ニールがどうすべきか考えていると突然、警報音が鳴り響く。
それと同時に、キーロックの上から赤いランプがせり出してきた。
ランプが出てきたのははそこだけじゃない。天井や他の壁からも出てきて真っ白な通路が赤く染める。
ストーリーモードを選んでいたなら、ここでＮＰＣがなにが起きたか説明してくれただろう。
でも今はマルチモード。そんな便利キャラはいない。

わけがわからぬまま立ちすくんでいたら、今度はニールを取り囲むように四台の円柱状の機械が床からせり上がってきた。
高さはニールの目測で百五十センチ。おそらく灰色な胴体からは銃身が一本出ていた。
そして名前だと思われる白いウインドウがそいつの上に現れる。
『ＡＰガンピラー』
「これが敵か！」

ニールは撃たれる前に持っている短剣で一台のピラーを攻撃する。
右から左へ水平に一発。ピラーは真っ二つにはならなかったけれど斬った手ごたえはあった。
『３０』
赤い文字で数字が表示される。

――これが与えたダメージ。でも残りＨＰは表示されないんだな。
冷静に思考を走らせつつ、まだ攻撃してこないＡＰガンピラーに連続攻撃を仕掛ける。
右から左下へ切り裂き、次は胴体辺りに突き刺す。
『ＭＩＳＳ』『２９』
そしてトドメとばかりに真上から垂直に斬り裂――けなかった。
まるでそこに敵がいないかのように刃がピラーをすり抜ける。
ＭＩＳＳとは違う。ＭＩＳＳでもかすったような感触はあった。
『ナイフ攻撃制限３回／２０秒』
「んなッ！」
叫んだ直後、ニールの腹に衝撃が。それに続いて背中に数発の衝撃を受けた。
ピラーから伸びる銃口から硝煙があがっている。四台のピラーが放った銃弾がニールに直撃したのだ。
痛みこそ感じていなかったが、口の中に広がる血のような味。鼻を刺す硝煙の匂い。
他にもニールは全体的に部屋が暗くなっているように感じた。一部、視界が欠けていたりもする。
――これがＥＰのダメージペナルティなんだ。ダメージを受ければ受けるほど視界が悪くなったりする。
あと、武器には制限がある。おそらくは一定時間内に規定回数以上の攻撃はできないんだ。
いや、攻撃しないインターバルがあの数秒必要なのかもしれないな。
攻撃されたことで冷静さを取り戻したニールは、今起きた現象を

素早く分析した。それを元に、時間稼ぎを試みる。
一度距離をとって左右に動いた。ピラーはその動きを追って回転しながら攻撃してきたが、弾丸のスピードは遅くて容易に避けられた。

そして十分すぎるほど時間を稼いだところで攻撃に移る。
すでにダメージを与えたピラーの銃口のない裏側に回りこみナイフを三度振るった。
『ＭＩＳＳ』『３０』『３１』
三度目の斬撃が当たった瞬間、ピラーはハンマーで連打されたかのように、ボコボコに凹んで壊れた。

さらに黒煙があがり、ショートしたようにパチパチと音が鳴る。
挙句の果てには、ガガガと変な音が鳴り始めてピラー自身も大きく震えだした。
そこでようやくニールは危機を察知する。

――こいつ爆発する！

ニールは急いで離れようとした。
しかし、三方向からの銃弾が飛んできて全てニールに命中してしまう。
衝撃で足が止まている間に、壊れたピラーが爆発してしまった。

ガードもできずもろに爆風を受け、ニールの体力が一気に削られる。
視界もあっという間に半分以上欠け、残った部分も真っ暗だ。口の中もなんの味だかわからない。
ウインドウも見えないので、敵の居場所はわからなくなっていた。
逃げるにしても、この狭い通路では背後から撃たれて終わり。完

全に打つ手はなかった。

ニールは敗北を覚悟する。しかし、このまま無様にやられたくもなかった。

「コンティニューできるからこそ簡単に諦められる。でも逆にコンティニューできるからこそ最後まで足掻ける。現実とは違う未来も結末も簡単に選べるんだ！」

自らを鼓舞したニールはナイフを闇雲に振りまわす。やられるまでに一台でも倒せればもうけものだ。

……けれどなかなか倒せも倒されもしなかった。

最後の抵抗とばかりに振り回したことや、少し動いていたことが功を奏した――わけではなかった。

「ふっ、断末魔を聞きつけてみれば、やばい状況だな」

颯爽と現れた救世主が

「うおぉらぁッッ！」

巨大な大剣で残る三台のピラーをあっという間に倒してくれたからだ。

「危なかったじゃねぇか坊主」

三台のピラーの爆発を背にして、片手で持った大剣の刀身を肩に乗せた男がニールに歩み寄る。

「……うるせぇな」

男は警報音が気に入らなく、キーロックの上の赤いランプを破壊した。

するとそれに連動したかのように他のランプも引っ込み、通路が赤から白に戻る。

この男の一連の行動、ニールには何一つ見えていない。

しかもダメージペナルティは視覚だけではなく、聴覚にまで及んでいる。
つまり、ニールは男の活躍はおろか存在すらも気づかずにナイフを振り回していた。

「なんだ、見えてねぇのか」
それを察した男は腰についたウエストポーチに似たアイテムバッグからカプセルを取り出す。
「ほら飲め」
「なんだ！？　うわっ」
そして、ニールの腕を掴むと無理矢理そのカプセルを口のあたりに押し付けた。

「あれ？　明るくなった？」
回復薬のおかげで体力がある程度回復して視覚と聴覚が戻ってきた。男も見えるように。
「えっと、あなたが助けてくれたんですか？　ありがとうございます」
ニールは戸惑いを覚えつつも頭をさげた。

「おう。それよりあんた、アイテムバッグを知らないのか。まずはだな――」
今日発売のゲームなのにベテランで渋い大人な雰囲気をかもし出す、制服を着た“少年”は、ニールの腰にもついているアイテムバッグの操作を教えてくれた。
ニールはその説明を聞きながら“少年”を観察した。

身長はかなり低い。推定で百四十後半だ。体の線も細い。スポーツはやっていなさそうだ。
顔の半分は装備品のマスクで隠されているが、出ている肌はきれ

いだった。声も高い。
ニールには小学校高学年から中学一年ぐらいに見えた。
さらにジロジロ見ていると、彼の頭上に小さめの青いウインドウが現れる。
それにはレベルと体力、そして実名らしきものが表示されていた。
『鈴木孝太　ＬＶ．７　ＨＰ７５／８２』
――これって勝手に実名が表示されている？　それともキャラ名を実名に？
というかなんか見たことある名前だ。
「説明は以上だ。なにか質問は？」
そこでちょうど質問タイムがやってきたので、ニールは遠回りに確かめようとした。
「あの、お名前は？」
「ふっ、名乗るほどの者じゃねぇよ」
孝太は照れてマスクの上から頬をかく。
なのでニールは質問の方向性を変えた。
「自分のステータス画面って見れるんですか？」
「そんなこともわかんねぇのか。しかたねぇやつだな」
孝太は質問されたことが嬉しくて、意気揚々とニールに説明し始めた。
「どうだ、見れたか」
「はい、見れました。ありがとうございます」
教えられたとおりにアイテムバッグをいじると、装備画面と一緒

にステータス画面が大きな青いウインドウで出てきた。
そこに書かれた名前はちゃんとニールで、実名はどこにも表示されていなかった。
他人に見えて自分に見えないはずがない。つまり、孝太は自分の意思で本名らしき名前をつけていた。

「そうか。よかったな」
「はい、よかったです」
ニールは本当の意味での安堵のため息をついた。

「あと、その画面を開いている時は攻撃できないから気をつけるんだぞ。攻撃はされるがな」
「なるほど」
ニールはあらためて自分の装備画面を見てみた。
武器はナイフ。そして防具はベーシックアーマーとマスクを装備していた。

――なにもつけていないわけじゃなかったのか。
このベーシックアーマーってやつにはグラフィックが付いてない？で、たぶんマスクは孝太のものと同じ。ただ、顔に装備してたから見落としていただけだろう。
初期装備なのはおそらく、顔も個人情報だから。それを晒すのはプレイヤー次第って訳だ。
……やっぱり、孝太に実名はやめた方がいいって教えたほうがいいよな。

「あのさ鈴木孝太さん」
「ふっ、名乗ってもないのに知られるとは。俺も有名になっちまったもんだ。で、なんだ？」
「あのですね――」

ベテランどころか天狗オーラまで出しはじめた孝太にどう話したらいいのか、ゆっくり喋りながら迷っていると

『赤に【小鈴愛理】が参戦しました』

「また本名っぽいのが来たッ！？」

本名よりハンネ

小鈴愛理はやってくるなりニールたちに襲い掛かった。
「切り刻むよッ！」
手にした初期装備のナイフで強烈な突きを繰り出す。
しかし、全ての攻撃が空を切った。プレイヤー同士の武器による攻撃の当たり判定がまだないからだ。

それを知らない愛理はさらなる攻撃を仕掛ける。
低い体勢をとって足で膝の裏を狙った。それも空振ぶ――らなかった。見事に膝の裏に直撃する。
ダメージこそ無いが、足を崩されたことでニールは尻餅をつきそうになった。
それめがけて、その場で回転した愛理が再び強烈な蹴りを放つ。
その衝撃でニールは頭から前のめりに床に突っ込んだ。

――今の技、見たことあるような。あとパーカーとハーパンって服装も。デジャヴ？
それにしてもマスクと小柄さが相まって忍者みたいなやつだな。

痛みは微塵も無かったのですぐに立ち上がると、愛理が悔しがった。
「くそぉ、なんで倒せないんだ。パグ？」
「パグは犬だぞ」
「あっ！　いいもん見っけ！」
孝太のツッコミを無視して、愛理は床に落ちていた拳銃の形をしている手のひら大の武器アイコンを拾った。

ただ、それをどうしたらいいのか愛理はわかっていなかった。

色んな角度から眺めてその方法を探る。振ってみる。かじる。
それでもダメなら、ナイフに重ねてみる。ナイフで削る。ナイフで刺す。
どの方法でも、武器のアイコンは武器のアイコンのままだった。

ついに諦めかけた愛理に孝太が救いの手を差し伸べる。
「アイテムバッグに収納してから装備画面で装備するんだ」
「む、こうか？」
愛理はなぜか素直にそれに従ってアイコンを腰についたアイテムバッグにしまった。
そしてオレンジのステータスウインドウを開く。

「こうか！　こうだな！」
はしゃぐ愛理は満面の笑みでいちいち孝太にあっているかどうか聞いた。しかし残念なことに装備画面の中身は他プレイヤーには見えない。
例にもれず見えていない孝太はできるだけ渋い表情を作り
「あぁ。あぁ。そうだ。あっている」
適当に相槌を打つしかなかった。

「マスクなんて邪魔。で、全部終わったら……完了を押す、と。よし、できた！」
愛理はウインドウを閉じて武器を構えた。
その瞬間、愛理とニールが叫ぶ。

「あぁ！　これ銃じゃん！」
「あの時の少年！？」
愛理は手にしたハンドガンに、ニールは彼女が列に並んでいた時に横入りを撃退した少年だったことに驚いた。
その横で腕組みしている孝太は「知り合いだったのか。縁っても

のは切れねぇんだな」と意味不明なことを呟きながらウンウンと頷いていた。

「まさか少女だったなんて……」

腰を抜かしかけたニールの口にしたこの一言に愛理が大きく反応する。

「あたしは少女じゃねぇ！　小鈴愛理、十五歳、二月十四日生まれの高校一年生だ！」

個人情報をさらに明かした愛理はジャケットの襟を掴んで銃口をニールの口に突っ込もうとする。

ただ、人間と武器の間に当たり判定がまだ設定されていないために銃は体をすり抜け――

「あがっ」

「汚い！　人の手を食べるなっ！」

愛理の手がニールの口に入り込んだ。

「人の手、舐めやがって……」

慌てて手を引っ込め顔を真っ赤にして恨めしげにニールを睨む。

「安心しろ。ここでは人間に味はしない」

「え……。まさか自分で自分を舐めたことあるの？」

「うむ」

孝太は少し引いている愛理に向かって、組んだ腕の片方を上げ親指を立てた。

「うわぁ……」

ドン引きの極みに達した愛理は手を食べられかけたことも忘れ、サッとニールの後に隠れる。

そして顔だけだけ出し、孝太に対する警戒心をあらわにした。

――やっと落ち着いてくれたか。でも愛理がいつまた暴れだすかわからない。ちゃっちゃと説明しちゃおう。
「二人ともそのままでいいから聞いてくれ。不特定多数の人が見る場所で実名とか――」

ニールは個人情報の大切さと危険性を少し大げさに力説した。
話が終わる頃には、孝太は天狗なべテランオーラなどどこへやら。顔は真っ青で、腕組みも自分の体を抱きしめているような形に。完全に恐怖の虜となっていた。
そして愛理も「へへん。そんな脅しにあたしが屈するわけないじゃん」と口では強がってはいるが、両足が小刻みに震えている。

「アニキー、俺どうしたらいいんすか？」
「すぐにキャラをつくりなおして名前を変えてくるといい」
キャラが崩壊して天狗から子羊になった孝太に優しくアドバイスすると、元気よく返事をしウインドウを開いて右手でなにか操作しだした。
「すぐに戻ってきますんで待っててください！　後これ持っててくれると助かるっす！」
「わかった。預かっとく」
まだ目に涙を浮かばせながらも軽く笑顔を見せ、武器アイコンにした大剣をニールに渡した。

「では行ってきまーす！」
『青の【鈴木孝太】が離脱しました』
敬礼をしながら消えたその場には青いウインドウだけが残っていた。

それを見届けていた相変わらず足元のおぼつかない愛理がポツリと感想を漏らす。
「チキンだね」
――いじっぱりで負けず嫌いか。どうしたら納得してもらえるんだろう。……そうだ。
ここで思いついた一つの案。成功するか微妙なところだったが試してみることにした。
「そういえばさ、フルネームだと二つ名が付いたときにダサいよね」
「なんで？」
「疾風の小鈴愛理。漆黒の小鈴愛理。稲妻の小鈴愛理。死神の小鈴愛理。武道を極めし者小鈴愛理」
ちょっと小ばかにしたようなニュアンスを言葉にこめて、愛理の心をくすぐりそうなワードを頭につけて何回か名前を呼んでみる。
愛理にもそれは伝わったようで口を尖らせ、抗議の睨みを送ってきた。
ちょっと良心が痛んだニールだったが、さらに畳み掛ける。
「下の名前だけでもダメだなー。一閃の愛理。轟きの愛理。銀の愛理。パワフルな愛理。魚眼レンズの愛理」
最後の方などもはや二つ名ですらない。
「ひどい……」
睨む気力さえも削がれた愛理は俯いてしょんぼりとした。
そこでニールは声音を優しくして穏やかに語りかける。
「小鈴さんは自分の名前に誇りを持っているんだよね」
ニールの問いかけに愛理は小さく頷く。
「だったら、名前をもじって横文字っぽくすればいいんじゃない？

たとえばアイリーンとか」
「アイリーン？」
興味を持った愛理は顔を上げる。
「そうアイリーン、あくまで一例だけどね。疾風のアイリーン。ほら、カッコよくなってない？」
愛理はちょっと考えてから「なってる……」と答えた。そして――
「アイリーン。気に入った、採用してやるよ！　待ってろすぐ戻る」
突然、元気を取り戻すと『赤の【小鈴愛理】が離脱しました』一瞬で赤いウインドウと入れ替わってしまった。
――まさか採用されるとは。「そんなの気に入らない！　自分で考える」とでも言うかと思ったのに。でもフルネームよりはマシだよな。
そんなことを考えていると、だれかが入ってきた。
愛理より先に作り直しに戻った孝太ではない。
『青に【伴地異人】が参戦しました』
「本名っぽいの多すぎだろ！」
ニールの叫びは通路でむなしく反響した。

使命感と倦怠感の狭間にいるニールがまた一から説明しようと待ち構えていると、すぐに地異人はやってきた。
身長は百七十ちょっとぐらいで、ニールよりも気持ち高め。上は黒いシャツに下は黒いジーンズと全身黒ずくめだ。
装備は初期装備らしく手にはナイフ。マスクも被っている。
そしてマスク上から覗いている目からは生気が感じられない。
ニールが心の中で「大丈夫なのか、こいつ？」と心配してしまう

ほどだ。

その目がまず最初に捉えたのはニール――ではなく床に四つ落ちている球状の黄色いアイコンだった。

濁っていた目に輝きが戻り、姿からは想像もつかない速さでその四つを拾い上げる。

そしてそのままニールの横をダッシュで通り過ぎ、ロックの解除されている自動ドアと化した扉を開けて、一人勝手に先に進んで行った。

「え？」

あまりの出来事にニールの思考は追いつけない。

しばし唖然としていると、左手側と目の前に二つのウインドウが続けて現れた。

『青の【伴地異人】が倒れました』

『青の【伴地異人】が離脱しました』

嵐のようにやってきた地異人は嵐のように過ぎ去ったのだ。

「なんだったん――」

『赤に【伴地異人】が参戦しました』

ただ、嵐は再来する。

再びやってきた地異人は先ほどと同じようにニールを無視して一人で先へ。で、結局やられて出て行く。

『青に【伴地異人】が参戦しました』

そしてまたやってくる。

先行、敗北、離脱。先行、敗北、離脱。先行、敗北、離脱。

なんども繰り返され、ニールが考えるのを止めた頃、地異人が初めて違う行動を取った。

もうどうでもよくなっているニールのところへやってくると

「早く戦えよクズ」
『赤の【伴地異人】が離脱しました』
暴言を吐いてどこかへ行った。

愛理からヘタレの称号を与えられているニールも、さすがに限界だった。
一人で待っている間、なにもしてなかったわけではない。
装備画面やステータス画面といったシステムウインドウを色々といじっていた。
ログアウト方法などを調べているうちに、部屋主権限（リーダー）で悪質なプレイヤーを追放（キック）出来ることがわかった。
ニールが『次、来たら問答無用で追い出してやる』と、決意新たに構えていると待ち人がやってきた。
『青に【ＥＫＵＳＵＫＡＲＩＢＡー】が参戦しました』

――危なッ！

ニールの手は怪しく赤黒く光る追放ボタンを押す寸前。無関係な人を蹴ってしまうところだった。
慌ててウインドウを消し、出もしない汗を手でぬぐいながらＥＫＵＳＵＫＡＲＩＢＡーさんの到着を待つ。

――にしてもすごい名前だな。正式な英語表記は知らないけどアレはすぐに違うってわかる。
ローマ字はいくらなんでも……カタカナ表記じゃいけないのか。
あと最後の伸ばし棒もおかしい。そもそもなんで武器を名前に？
こんな名前にするのはどんな人なんだろう。やっぱり小学生とか中学生とか？

ニールの読みは正しかった。
「アニキィ！」
「孝太！？」
ただし、手を振りながら走ってくるのが孝太だったことは想定に入ってなかったが。

「その名前さ――」
「かっこいいすか？　よくわかんないけどこれって有名なんすよね！」
指摘するべきか迷った。でもやはり、格好いいと信じて疑わない孝太カリバーの純粋な瞳には勝てない。
ニールは預かっていた大剣を差し出しながら「あぁ、かっこいいな……」と褒めた。
少し歯切れを悪くしたのは最後の抵抗だ。

「へへっ」
そんな褒め言葉も、最大級の褒め言葉に聞こえた孝太カリバーは、嬉しくて装備した大剣をその場で回転しながら振り回した。
ニールにこそあたらなかったが、壁にはいくつもの切り傷を浅く刻んだ。

『青に【疾風のアイリーン】が参戦しました』
ちょうどそこに愛理改めアイリーンも帰ってきた。
二つ名を頭につけてくる暴挙にでていたが孝太カリバーのインパクトには遠く及ばない。
なのでニールは暖かい気持ちでもってスルーした。

「ところで孝太はなんでローマ字なの？　エクスカリバーはＥｘｃａｌｉｂｕｒが正しいスペルだよ」
でも、アイリーンは孝太カリバーをスルーしなかった。

孝太カリバーが落とした大剣が音を立てる。その音は孝太カリバーの心情を表しているようだった。
「それとエクスカリバーは剣だから。人名じゃないよ」
さらにアイリーンが追い討ちをかけると、孝太カリバーはニールに視線で助けを求めた。

ただ、あいにくニールでもＥＫＵＳＵＫＡＲＩＢＡーは擁護のしようがない。
答えあぐねる姿を見て孝太カリバーもそれを察し、肩を落とした。
「しょうがないやつ」
アイリーンは腰に手を当ててため息をついたかと思えば、手に持っているナイフで床に文字を書きはじめた。

「Ａｒｔｈｕｒでアーサー。エクスカリバーを持っていた勇者の名前だよ。孝太にはもったいない名前だけど自由にすれば？」
直線的なアルファベットで書き終えたアイリーンは耳を少し赤くしてそっぽを向いた。
「アネゴー！」
孝太カリバーは両手を目いっぱいに広げて抱きつこうとする。
しかしアイリーンの身のこなしは圧倒的だ。無駄のない動きで軽々と両腕を潜り抜ける。
それでも孝太カリバーのテンションは下がらない。

「俺一生、アニキとアネゴについてきます！」

【ニール】
【疾風のアイリーン】
【Ａｒｔｈｕｒ】

こうして三人のＬＶ．１なキャバリエが揃い踏んだ。
いよいよ進撃を開始する――その前に

「アニキ、出来れば部屋の放棄をしてもらえないすか」
「部屋の放棄？」
「ハイッす。ＥＰ配分は部屋にいる時間で決まるんです。だから――」
「そういうことか。じゃあ、つくりなおそう」
ニールはウインドウを開き、ミッションを放棄した。

『青の【ニール】は２０のＥＰを獲得しました』

卒業試練T

――卒業試練T

再び部屋を建てると愛理改めアイリーンと孝太カリバー改めＡｒｔｈｕｒ（アーサー）が入ってきた。

「じゃあ行っくよー！」

集合して真っ先に飛び出したのはもちろんアイリーンだ。

元気よくキーロックのある扉のところまでペタペタ走って警報を作動させる。

警戒音と共に赤く染まる通路。アイリーンを囲むようにせり上がる四台のＡＰガンピラー。

さっきニールが陥った状況と同じだ。でも――

「アイリーンなら余裕そうだな。それよりその剣はどこで拾ったんだ？」

「これは伝説の剣でして、そう簡単には手に入らないっすよ」

二人はあれだけ動けるアイリーンなら一瞬で鉄クズに変えると信じきっていたので談笑していた。

そんな二人の期待を裏切り、アイリーンの悲鳴が警戒音に混じって通路に響く。

気づけば、あんなに元気で頼もしかったアイリーンが頭を抱えてうずくまっていた。体力もすでに半分以上削られていてゲージは緑色から黄色になっている。

そんなアイリーンにはまだ四方から硝煙が昇る銃口が向けられていた。

「愛理！？」

「やばいっす！」
慌てて二人は助けに走った。
アーサーはまず手前にいる二台のピラーを大剣で横なぎに斬り払う。
しかしレベルの下がった攻撃力では一撃とはいかない。そして破壊されるのを待っていてもくれない。
形そのままのピラー四台がついに銃弾を放った。

一斉に放たれたその全てがアイリーンを覆うようにして庇ったニールの腕や体に着弾する。一気に欠ける五感。
「愛理、どうしたんだ！？　具合が悪くなったのか？」
それでもニールはアイリーンの心配をした。
しわが眉間に刻まれるぐらい強く目をつぶり、腕が小刻みに震えるほど手を耳に押し付けて塞いでいる。
まるで外から入ってくる情報を全て遮断したがっているようだ。
それでもニールは声をかけ続けた。撃たれるのも構わず何度でも回復薬を使いながら。

へこたれずに名前を呼んだのが通じたのか、アイリーンが目を開けて顔も少し上げてくれた。
さっきの個人情報の取り扱いの時のアーサーの比じゃないほど、アイリーンは怯えている。
さながら肉食動物に目を付けられた小動物ようだ。

ただ、怯えるアイリーンにも意地があった。
全身を支配する恐怖を抑えることは出来ない。それどころか全身の筋肉が拒絶して身動き一つとれない。
だけど口だけなら少しだけ動かせる。アイリーンはニールに伝えるため、喉から声を絞り出した。

「……っ……」
小さいのか出ていないのか、アイリーンの声は鈍ったニールの聴力では聞き取れない。
この時ほど警報音や爆発音がうるさい思ったことはなかった。
なおも懸命に少し動かしている口にニールも耳を近づける。するとかすかに聞こえてきた。

「……あ……かっ……」

――あか、あか、赤？　愛理がこうなったのは赤くなった通路が原因？
愛理は赤がどがつくほど苦手だとしても、それだけでこうも怯えるようになるのか？

分析している間にもピラーは二人を狙っている。
時間がおしいニールは考えるのを止め、すぐに行動に移った。
一台のピラーの銃口を引きつけながら少ない視界で警報ランプを探す。

――あった。届くか？

届くか届かないか微妙な位置にある警報ランプに向かって、ニールはめいっぱい腕を伸ばしながらジャンプしてナイフを突き立てる。
手ごたえあり。見事ナイフは警報ランプのど真ん中を裂いていた。
ひびの入った警報ランプは、ニールが着地すると瞬間に、割れて壊れた。
さらに、たった一つを壊しただけなのに連動して他のランプも停止する。

白さを取り戻した通路。けれど敵が引っ込んだわけではない。

すでにアーサーが二台をスクラップにしたものの、まだ二台も残っている。
そのうちの一台をアーサーが相手をしていた。
そしてもう一台はニールを狙って――いない。いつの間にか照準をアイリーンに戻していた。
しかも、すでに何度か攻撃していたようでアイリーンの体力ゲージも短く、黄色から赤色に変わっていた。もう、一発で確実にアウトだ。
アーサーは戦闘中でそれに気づかない。ニールも間に合う距離じゃなかった。

ピラーがかん高い異音を鳴らしながら一段階、高くせり上がる。
今までにはないモーションにニールは、これからピラーが強烈な技を放つ予感した。
そしてそれは的中する。ピラーの胴体から銃口が二つ新たに出てきた。
縦に計三本となった銃口は時間の猶予など与えてくれず一斉に発砲した。
乾いた音ともに、通常の弾よりもスピードを増した三発の弾がアイリーンを襲う。

もはやニールは手も足も届かない。だからこそ、とっさに動かしたのは――
「愛理！　ここはもう赤くないッ！」
口だった。それは残り体力の少ないアイリーンに聞こえるはずのない叫び。
「ホントだぁ！」
でもアイリーンは反応した。

着弾間近だった三発を寸前のところで消えるようにかわす。
そして素早くジグザグに間合いを詰め、ナイフで五度ほど突き刺した。
『２９』『２９』『４７』
ナイフの性能に阻まれて二回ほどスカったけれど、アイリーンは気にもせず、今度は下段の蹴りをピラーに叩き込もうとする。
もちろん、ダメージを与えられずに華麗にすり抜けた。
「なんで！？　お前もパグなのか！？」
自信のある一発が通用しなくて精神的な衝撃を受ける。

「武器のナイフじゃないとダメージは通らないんだろ」
「パグじゃなくてバグっすよ、アネゴ」
ちょうどそこに戻ってきたニールと三台目も倒し終えたアーサーが合流した。
「いくよ！」
アイリーンそんな二人からアドバイスを流し、再び仕掛ける。

ナイフによる三連突き。それに続いたニールの縦斬りとアーサーの横一閃。
三人による三方向からの同時攻撃を受けたピラーは形を歪に変え煙を吹いた。
そして三人が下がった瞬間、爆発して大きな炎の塊となった。

「なぁ、なんで蹴りが効かないんだ」
戦闘が終わってもまだ理解してないアイリーンは不思議そうに問いかける。
「見えてないな」
「すね」

少し焼け焦げている壁に向かって。

「見えも聞こえもしてないのにどうやって戦ってたんだろ」

「勘とかすかね？　おれ、薬あげてくるっす」

アーサーは歩きながら回復薬を取り出す。

それを迷うことなく頬に押し付けた。頭上にある青いウインドウに表示されている体力が一瞬で最大まで回復する。

「んわっ！？　敵襲かッ」

五感が戻ってきたことでほっぺたの違和感を捉えたアイリーンはすぐさま臨戦態勢をとる。

「……なんだ孝太じゃん」

けれどすぐに違うとわかり、拍子抜けして肩をすくめた。

「アネゴォ、本名を呼ばないでくだいさいっすよぉ……」

ただそれはアーサーに対しては大ダメージだった。

周囲を不安げに見回す姿は王様でも勇者でもなく、さながら迷子になった子供だ。

それを見ていたニールは引率の先生になった気分になった。

先生気分なのに戦闘においては一番活躍してなかったが。

「なぁなぁ、これってなに」

そわそわするアーサーを横目にアイリーンは床に落ちている四つの黄色い球体のアイコンを指差した。

「なんだろ……」

――これってさっき、嵐が真っ先に拾ってたやつだよな。

ニールが一つ拾い上げるとそれは消えてしまう。

「あれ、あれ、あれぇ？」

アイリーンが拾ってもそれは同じだった。残りの二つも不思議が

るアイリーンの手の上で消えてしまう。

アーサーはただ一人だけこの消える謎の答えを知っていた。

「EPはクリア後かミッション放棄時に配分されるっす」

「いーぴー？」

聞き慣れない単語にアイリーンが首を傾げる。

「このゲームの通貨っすね。これがないとレベルアップや買い物ができないんすよ」

「そっかー。さてじゃあ、そろそろ行こうよ」

もやもやがとれたことで興味を失ったアイリーンは開いた扉を指差す。

そして二人の返事を待たずに走り出し――急停止した。

――さっきのアレの話をしようとしている。

そわそわしている彼女の背中を見ただけで、ニールの直感がそう告げた。

その直感を後押しするかのように、アイリーンは大きく二度息を吸って吐く。そして――

「あたしは全身が赤くなるのがイヤ。血まみれみたいじゃん」

背中を見せたまま軽い感じで理由を告げると、

「だから、ニールも孝太も赤くなっちゃダメだから！　赤くなったら死ぬほど心配してやるっ！」

妙な捨て台詞を残して逃げるようにダッシュで隣の部屋に特攻し、

「隣の部屋も赤だったぁ！」

すぐさまUターンしてきた。

「さて、どうしようか？」
三人は隣の部屋に行くにあたっての作戦会議を始めていた。
「赤くなければ、あたしが突っ込むよ」
アイリーンはパーカーの袖をまくって力こぶを見せ付ける。
――普通の女の子よりはあるけど、そこまで。むしろ触ったら気持ちよさそう……って、違う違う。
「その赤の発生源である警報ランプをどうにかするかを問題にしているんだ」
ニールの指摘を受けてしょんぼりとした。

そんなアイリーン以上にアーサーはマイナスオーラを発していた。
元気がないのは、さっき本名を呼ばれたのがトラウマを刺激し、それがまだ尾を引いているため。
ただ、会議に参加していないわけでもない。緩慢な動きながらアイテムバッグをあさっていた。

少しして武器アイコンを引っ張り出した。
「……コモンですが、さっきの戦闘でこれ拾ったっす」
「コモンってなんだ？」
聞き慣れない単語にアイリーンは首を傾げる。
「……一番レアじゃないってことっす」
厳密には違うはずが、ニールもきちんとした意味は知らないので水を差さなかった。
「つまりよわよわか。パスだな。……よし、ならニールがこれを使え！」
アイリーンは無理矢理、ニールのアイテムバッグの中に武器アイ

コンをぶち込んだ。
苦笑いを浮かべながらチェックしてみると、そのアイテムはハンドガンだった。
「射撃武器か。これなら敵が出ても警報ランプを破壊するのは簡単になりそうだな」
特にこだわりのなかったニールは装備をハンドガンに切り替えた。
――これで活躍すれば目立てるかもしれないしな。

「じゃあ俺とアーサーが突撃して、警報ランプを破壊してから合図を出す。それでアイリーンが突入でいいか？」
「おっけー」
「おれオッケーっす」
元気いっぱいのアイリーンとハンドルネームを呼ばれて少しだけ元気を取り戻したアーサーの同意を得られたので、ニールは勢いよく立ち上がった。

「おれが盾になるから、ランプは任せるっす」
「わかった。頼りにしてるよ、アーサー」
ニールがハンネを呼び肩をポンと叩くと、アーサーに笑顔が戻り、背筋がピンと伸びた。

「行こうっす！」
「あぁ」
「そうだ、一ついい？」
勢いよく発とうとした二人の勢いをアイリーンが止めた。

「まだなにか不安なことがあるのか？」
「んーん」
アイリーンは勢いよく首を横に振って、ショートカットをバサバサさせる。

そして二人を指差した。
「あたしのことはリンと呼べ。アイリーンじゃ長いし、本名もダメなんだろ？　だったらリンだ」
「そうか。じゃあ、リン、アーサー、行くぞ！」
「おぉ！」
三本の腕が限界まで高く突き出された。

機械集団

警報ランプが鳴り響く赤い部屋で、ニールとアーサーを待ち構えていたのは大量の機械達だった。
『ＡＰガンピラー』『ＧＮムーブウォール』『ＡＰチェーンカッター』
三種類の敵が十台以上もひしめいている。その中でも特にＧＮムーブウォールが二人には厄介な相手だった。
足元にローラーのついた少し厚めの金属板。鈍足だが図体がでかい。高さはニールの身長よりもはるかに上だ。
その二メートルを越す巨体が二人の視界にある警報ランプを覆い隠していた。
――横幅もすごいし色々と厄介だな。なんとか横をすり抜けて、ランプを狙える位置にいかないと。

「手はず通り、おれがオトリをするっすから！」
「アーサー！？」
盾からオトリへ勝手に役割を変えたアーサーは飛び出して、全てのウォールをひきつける。
ニールは援護しようと銃を構えた。

「俺はいいっすから今のうちに早く！」
けれどアーサーはそれを拒否して、警報ランプの破壊を優先するようニールに求める。
一瞬迷ったニールだったがアーサーを信じることに。
――いざとなったら蘇生薬が一つあるしな。
ウォールの横をすり抜け残る二種の敵が待つ奥へ進んだ。

さっきと違い、この部屋には警報ランプは一つしかない。それも

一番奥だ。
ＡＰガンピラーやＡＰチェーンカッターは強烈な赤い光をだすランプを守ったり行く手を阻むように、床や壁からせり出していた。
――カッターもその場から動けないのか。
ＡＰチェーンカッターにもしっかりとした本体がある。そこから一本の鎖が伸び、円盤状のカッターの中心に接続されている。

ピラーの攻撃を避けながら、ためしに五発ほど撃ってみた。
そのうちの二発が狙い通りにランプ一直線だったが、その両隣に生えているＡＰチェーンカッターの半径五十センチほどの強大な刃に阻まれる。
しかもノーダメージだ。
――この武器じゃカッターにはダメージが通らないのか。もしくは物理無効。これじゃ、もっと接近しないとランプは壊せそうにないな。
ニールはカッターの攻撃パターンを知るため、床にいる一台に接近した。

本体を回転させ、チェーンを通してカッターを振り回す。カッター自体も回転している。
さらに、よくよく目を凝らすとカッターの刃がギザギザなことがわかった。
――現実世界で当たったら痛いじゃ済まなさそうだ。けど、攻撃中は本体がたびたび露出してる！

ニールはカッターの攻撃範囲の外から銃をぶっ放す。
『３５』『ＭＩＳＳ』『０』『３５』『３３』『ハンドガン攻撃制限５回／１５秒』
攻撃に夢中になりすぎてピラーからの一発をもらってしまっていたが、ニールはカッターの基本的な行動パターンとハンドガンの性

能を理解できた。
だからそのカッターに見切りをつけ、アイリーンを早く戦えるようにするために、部屋の奥へと目指す。

ピラーもカッターも攻撃速度が遅い上に攻撃回数も少ない。だから簡単に奥までたどり着けた。
残る問題はランプ横のカッター二台と背後からくるピラーの射撃。
ニールはピラーの射撃は動いていれば当たらないと踏んで無視し、ギリギリまでカッターに近づいた。

途端にまわり出すカッターの刃。けれどそれはニールには届かない。
――こうしてみるとなんかマヌケだな。
ニールは冷静に露になった警報ランプを撃ち抜いた。

ひびが入り、少しのタイムラグの後、砕ける。
たった一発の銃弾で警報ランプは粉砕され、けたたましく鳴っていた警報音も鳴り止――まなかった。
破壊に成功したのはたしかで、赤く染まっていた部屋に白さは戻っている。
――なんで鳴り止まないんだ？　これじゃ、リンに声が届かない。直接、呼びに行くしかないか。
振り向いたニールの目の前に、隙間なく等間隔にＡＰチェーンカッターが十台ほど床からせり出してきた。その後にはＡＰガンピラーの姿も。
「これが大ピンチってやつか！」

ピンチな状況に陥っていたのはニールだけではなかった。
「硬てぇな」
ベテランモードのアーサーは高い耐久を誇るＧＮムーブウォールをなかなか倒せないでいた。
あまり接近しすぎると体当たりで体力を減らされる。じわじわ後退しながらの戦いだ。

一台を集中攻撃してようやく倒せたその時、床や壁が白に戻り、ウォールが銅色を晒す。
ウォールに阻まれて見えないが、アーサーにはなにが起こったのかすぐにわかった。
「アニキ、やってくれたんすね。って、やべぇぞこいつは……」
雰囲気が一瞬でベテランから舎弟に切り替わり、そしてベテランへと戻ったアーサーの瞳に映るのは、ドミノ倒しで迫ってくるＧＮムーブウォールの姿。
壁際まで追い込まれていたアーサーにはこのボディプレスから逃れるすべはなかった。

「くそっ……」
「アーサー！」
回復薬を使って強引に突破して帰ってきたニールが助ける暇もなく、押しつぶされてしまった。
大きな振動とほぼ同時に、なぜか砂埃のようなものが舞う。

けれど、倒されたことを告げるウインドウが出てこない。
「アーサー無事なのか！？」
「来ないでくださいっす！」
急いで助け出そうとしたニールをアーサーが静止した、次の瞬間
――

警報音をかき消すほどの爆音。空気が震え、衝撃と共に銅色に光る破片が飛び散る。

倒れていたウォールの全てが大爆発を起したのだ。

威力はピラーの爆発の比じゃない。離れていたニールでさえも衝撃と破片で体力を削られていた。

その中心にいたアーサーはもちろん

『青の【Ａｒｔｈｕｒ】が倒れました』

残っていたわずかな体力を全て奪われてしまった。

「すぐに生き返らせるからな！」

爆発が収まってすぐ、ニールは回復薬を取り出して倒れているアーサーの元に行こうとした。

そんなニールの目にアーサーの真上を飛んでいる一つのアイテムが映る。

――あれは。

少しずつ加速しながら真っ黒にこげた床に倒れているアーサーの頭へ落ちていく。

ポンと首の辺り着地したそのアイテムは、まばゆい光を放ち

『青の【Ａｒｔｈｕｒ】が復活しました』

アーサーを生き返らせた。体力も全快だ。

「心配かけたっす」

立ち上がったアーサーは恥ずかしさと申し訳なさが入り混じった笑顔を浮かべながら頭をかく。

その表情はマスクで隠れていたけれども。

「どうやって生き返ったんだ？」

「自己蘇生って小技っす。詳しくは後で教えるのでアネゴを呼びましょう」

「そうだな。そっちが先だ」
二人がピラーに注意を払いながらアイリーンのところへ。
「おっそーーーーい！」
戻るなり二人は顔を真っ赤にしたアイリーンに怒られた。すぐに正座させられ説教だ。
五分ほどしたところで「で、どうして遅かったの？」ようやく二人は話を聞いてもらえた。
とは言え、まだご立腹だったので正座したまま遅くなった経緯を喋った。
「……うん、それならいい。忘れられたかと思った。元をただせばあたしのせいなのに、ごめんね」
しゅんとしたアイリーンが深々と頭をさげる。納得してもらうどころか謝られてしまった。
アイリーンのらしくない行動に二人は逆に困ってしまい、
「いやいや、これだって協力プレイだよ。ゲームなんだし楽しもう」
「そうっすよ、敵もまだまだいるっすよ！」
なんとかテンションをあげてもらおうとフォローする。
「しゅっぱぁーーーッ！」
「立ち直り早ッ？」
敵と聞いて元気を炸裂させたアイリーンは我に続けとばかりに先陣を切った。
警報音がいつの間にかやんだ部屋での三人揃っての戦闘は、厄介なＧＮムーブウォールがいないということもあって、楽勝ムードだった。忙しいし油断は出来ないけれど。

ピラーはアーサーが、カッターはニールが破壊していく。
そしてアイリーンはピラーもカッターも相手取っていた。
ピラーは普通に切り刻む。接近戦だと対処しにくいはずのカッターも動きを見切って懐にもぐりこんで本体を刺しては離脱する、いわゆるヒットアンドアウェイで削り倒していった。

ほぼ無傷で散らばっていた雑魚を消し去り、残るは密集カッター群とランプ横のカッター二台だけ。
ただ、三人はこの密集したカッター群に手を焼いていた。
ニールが近づいて銃で撃っても他のカッターの刃で防がれ、アーサーの大剣は長さ負けし届かず、アイリーンでも懐にもぐりこめない。
カッター達はお互いがお互いをカバーしていて隙がなかった。

「どうするっすか？」
アーサーは集合した二人にアイデアを求める。
「そうだなぁ……」
「中央突破だ！」
アイリーンは再度正面から挑む。カッターはそれに反応して一斉に回転を始めた。
けれどアイリーンはひるむどころか不敵な笑みを浮かべる。そして、かけ声えと共にナイフを投げた。
風を切り裂き、一直線に一台のカッターの本体めがけて飛ぶ。
刃と鎖をすり抜け――
「あれ？」

そして本体をもスルーして床に刺さった。
攻撃が通らなかった『０』や、外した『ＭＩＳＳ』の表示すら出ない。
だれがどう見ても投げたナイフに攻撃判定は発生してなかった。

浅くしか刺さってなかったナイフが倒れて悲しい音を立てる。
そんな光景に、アイリーンはセンチメンタルに心の声を漏らした。
「パグ……か……」
「仕様だろ」
「パグじゃなくてバグっす」

「さ！　どうしようか！　武器なくなっちゃった」
ツッコミを流したアイリーンが手をブラブラとさせながら戻ってきた。
「ほら、これ。今は使ってないから」
「おー、ありがとー。後で返すね」
武器アイコンにしたナイフをニールから受け取って、すぐに装備した。

手にナイフが現れ、落ちていたナイフは姿を消す。
「んにゃ？　もしかして、装備外せば戻ってくる？」
アイリーンがまた操作すると、手のナイフが消え、また手に現れる。
「おー、こうすればよかったんだ。よし、返す！　じゃあ、いってきまーす」
学校に行くような軽い感じで、爽やかに駆け出した。

「アネゴは竜巻みたいな人っすね」
「それを言うなら嵐……」
訂正しようとしたニールの頭の中に天気図が浮かんできた。
それも大きな竜巻が発生しているやつだ。
「それだッ！」
突然、笑顔が溢れたニールをアーサーはポカンと見つめた。

アイリーンが攻めあぐねている後で、アーサーはニールを肩の上に立っていた。
小さい方が大きな方を支える。なんともちぐはぐだが、それもこれもアーサーのこだわりがそうさせた。
「やっぱり変わった方がいいんじゃないのか？」
「平気……っす」
ニールが心配そうに声をかけても、顔を真っ赤にしてふらつきながら土台を務めるアーサーは頑なにそれを拒んだ。
――そんなに剣しか使いたくないのか。

「……それよりも……どう……っすか」
「いい感じだよ」
丸見えとまではいかなかったが、銃で本体を撃てそうなカッターはそれなりにいた。
どんなに荒れ狂う竜巻も中心は穏やか。穴の開いた筒も同然だ。なら上から狙えばいい！
ニールはバランスを取りながら狙いを定めた。

そして制限回数まで撃つ！　待つ！　撃つ！
分断してアイリーンが戦いやすくなるような敵を優先してニールは破壊していった。
その甲斐あって、孤立した敵は全てアイリーンのナイフの餌食に。
残る敵を殲滅するのにさほど時間はかからなかった。

ゲート

ドロップしたＥＰを回収し終えたニールたちは次へ進むことにした。
白い自動扉を抜けた先は、大人が十人入れば身動きが取れなくなるほど、小さな正方形の真っ白な部屋。敵の姿はない。
ただなにもないただの小部屋というわけでもなかった。
床に、水色に淡く光り揺らめく、謎の幾何学模様がスペースいっぱいに描かれている。

「なんだよここ？」
戦闘を期待していたアイリーンはちょっとガッカリしながらしゃがみこみ、床をペチペチと叩いた。
ニールも触ってみたが、特にでこぼこした感触はない。
――これはワープか？
「この紋様は神秘転送っす」
名称は違ったがニールの予想は的中していた。

「よくわかんないけど、なんでそんなこと知ってんの？」
アイリーンが疑いの眼差しを送るも、アーサーの物知り顔は崩れない。
「一度来たからっすよ」
「そうか、アーサーはここをクリアしてるのか」
ニールは最初のアーサーのＬＶ．７ぐらいだったことを思い出した。

「はいっ。でも、さっきの大量湧きは初体験っすよ。あの警報ランプはトラップだったんすかね」
アーサーは腕を組んで首を傾げる。

「そんなことよりも、なんなのこれ！　剥がせばいいのか？」
アイリーンはナイフでガリガリと床をひっかいた。けれど傷の一つもついていない。
この転送部屋は今までの部屋とは違い、なにをしても壊れない設定になっていた。

「だから、どーすんだよっ」
「あぁ、ここは天井の……」
アーサーの説明が終わるのを待てなかったアイリーンは天井は見上げ、
「ゲート！」
その場から消えた。

「今のが転送するための呪文か？」
「天井に書いてある文字を叫ぶと飛べるんすよっ。それより追わないと、ゲート！」
なぜか焦っているアーサーも姿を消した。
残されたニールはのんびりと天井を見上げる。そこには床と同じような模様が描かれていた。
ただ床とは違って、その模様を利用して文字を浮かび上がらせていた。

「へー、器用なことしてる。なんでだろ」
考えてもわからなかったのでニールも二人の後を追うため呪文を唱えた。

『ゲート：三人目か！　よくぞ突破してきた！』
大柄で野性味あふれる男が、白い大部屋にやってきたニールへね

ぎらいの言葉をかけた。
その一方で、手にしたアーサーと同じ大剣でアイリーンに斬りかかっている。
でも、相変わらず身のこなしが冴えているアイリーンには当たらない。逆に連続攻撃を叩き込んだ。
『２５』『ゲート：痛ぇな』『ＭＩＳＳ』『２１』『ゲート：痛ぇな』
ナイフできざまれているにしては薄い反応。それどころかなにごともなかったかのように大剣を振るう。
攻撃直後のわずかな硬直を狙われたアイリーンは、わき腹を腕ごと叩き斬られ、吹っ飛ばされた。

「くぅ……。ほんとに持ってかれたかと思った……」
すぐに立ち上がったアイリーンは自分の腕がくっ付いてるのを見て、ホッと胸をなでおろした。
『ゲート：おいおい！　距離があるからって油断すんなッ！』
そこへ男が追撃にはしる。思いっきり床を蹴って、片手で持った大剣を突き出す。アイリーンがかわすと今度は横になぐ。
それも避けたアイリーンが負けじと反撃をはじめると、壮絶な刃の応酬となった。

一見して優勢なのは、ほとんどの攻撃を処理しきっているアイリーンだ。
ニールもハンドガンで一桁ダメージのスズメの涙ながら援護をはじめ、よりいっそう差は開いていたはずだった。
でも、男はどんなにダメージをもらっても全く堪えない。それどころか豪快に笑いながら片手で軽々と大剣を振り回している。
その様は、完全に人間の枠を超えていた。
そもそも、外見からして本物の人ではない。彼の体は３Ｄモデル、言わばゲームのキャラクターのようなような姿をしていた。

そしてセリフも全て『ゲート：オラァッ！』ふきだし。つまり彼はＮＰＣだった。

男が再び強烈な突きを繰り出した。

その大剣は背中の後を通る。アイリーンはギリギリのところでかわしていた。

「危ないじゃんか！」

文句を言いながらもアイリーンは振り向きざまに一発、男の背中を斬りつけた。

けれど男は止まらずに、なぜか部屋の隅っこでアイテムバッグを操作していたアーサーとの距離を詰める。

――狙われてるのに気付いてない！

「アーサー！」

ニールは名前を呼びながら男を撃つ。でも、この程度では止まるはずがない。

アーサーも声には反応していたが、すでに遅かった。

とっさに盾にしたアーサーの大剣をすり抜け、男の大剣がを串刺しにする。

その衝撃でアーサーは壁に打ち付けられた。

『ゲート：手加減してやるから耐えろよ？』

さらに追い討ちをかけるように、一歩下がった男が両手で持った大剣を斜め後にたらし、力を溜める動作を見せる。

――まずい、大技だ。

――強いのくる！

ニールはアイテムバッグに手をかけ、アイリーンは救出しに走る。

『ゲート：剣起旋風（けんきせんぷう）……ただの回転斬りいいいいいッッッ！』

けれど男はアイリーンが間に合う前に必殺技を発動させた。
その場で高速回転して周囲を斬りつける。
アーサーはその全てを体に受け、男のすぐ後までやってきていたアイリーンはバックステップで範囲外へ逃れた。
この技は斬撃と同時に強烈な風も巻き起こしていて、アイリーンの髪やパーカーのフードをなびかせ、投げの体勢をとっているニールのバランスも少し崩した。

男は高速回転する体を踏ん張ることで強引に止める。
『ゲート：ふぬっ！　とどめぇッ！』
そして、そこから技のフィニッシュとして、床から天井へ届けとばかりに大剣でおもいっきり斬り上げた。

もろにくらったアーサーの小さめな体は風にさらわれたチラシのようにふわりと舞い上がる。
『青の【Ａｒｔｈｕｒ】が倒れました』
力尽きたことを通知するウインドウも出てきた。
しかし次の瞬間、アーサーの体が光に包まれ、体力がみるみる回復していく。
この現象は蘇生薬によるもの。

『青の【Ａｒｔｈｕｒ】が復活しました』
「よしっ」
「ナイスタイミング！」
ニールは小さくガッツポーズし、アイリーンも手柄主に賛辞の言葉を送った。
そう、ニールが蘇生薬を投げていた。
投げた本人も当たるとは思ってなかったし、アーサーが打ち上げられてなければ明らかに外れていたこともあいまって、嬉しさは倍

増だ。
ただ、喜びに沸く二人は大きな勘違いをしていた。
まだ、アーサーは死地から脱出したわけではない。
『ゲート：オラァッ！』
男は空中にいるアーサーめがけて大剣を勢いよく振り下ろした。
大部屋に硬いものがぶつかった音が二重に響く。
壁に刺さった二本の大剣、一本は敵を捉えきれなかった男の、そしてもう一本は空中で移動するためにアーサーが壁に打ちつけたものだ。
その反動でアーサーは男の攻撃をさけ、そして着地と同時に走って距離をとることに成功した。
ただ、アーサーの体力は三分の一ほど削られている。
空中で腕、距離をとるときにも背中へ軽くかすっていたのだ。
アーサーは壁に刺さったままの大剣を回収するため、システムウインドウを開いた。
『ゲート：おいおい！　距離があるからって油断すんなッ！』
男は、ニールに撃たれたりアイリーンに背中を斬られながらも、大剣を突き出しアーサーに突撃する。が――
「してないさっ」
大剣は二人の間に割って入ってきたアイリーンの左腕に突き刺った。
アイリーンが、攻撃できないインターバルを利用して、こんな行動をとったのには簡単なわけがある。
わざと一度受けることで、男のターゲットを自分に移そうとしたのだ。

『ゲート：オラァッ！』
「ははっ、どこ振ってんの！」
そして、男は思惑通りに動いてくれていた。でたらめな剣技でアイリーンの首を狙う。
アイリーンはそれをことごとく空振りにしてみせた。

再び始まったアイリーンと男の斬り合い。ニールはその戦いを見渡せる位置でペチペチと軽微なダメージを男に与えていた。
――これが決闘だったら罵倒ものだな。
なんとなく自分の戦い方にネガティブな感情を抱きつつも撃つ続けるニールはふと気付いた。
アーサーが戦いに参加してこない、と。

見れば、アーサーは後ろで大剣を構えたまま固まっている。体力も減ったままだ。
撃つのも忘れて観察していると、眉をハの字にしているアーサーと目が合った。
理由はよくわからなかったが、困っているのはたしかなので、男に近づかないように注意しながらアーサーの元へ走った。

「すみません。回復尽きたっす。だから邪魔にならないように端っこで……」
初期装備として持っている回復アイテムは回復薬が十に蘇生薬が一。アーサーはその全てを消費してしまっていた。
「一番体を張ってくれた上に、俺やリンに使ってくれたもんな」
ニールは自分の回復薬の残数を確認した。残るは四。

「よし、六つあるから半々で三つだ」
「でも……」
「ほら」

念のため一つだけとっておいて、残りを全て押し付けるように渡した。

「じゃ、いこう！」

「はいっす！」

アーサーだけがその場から飛び出した。

「後から失礼するっすぜい」

アーサーはベテランと舎弟が入り混じったオーラをかもし出し、大きく大剣を振るう。

『６００　Ｂｒｅａｋ』

とてつもないダメージ表示と共に、鈍い音。そして折れた大剣の刃が回転しながら床に突き刺さった。

「……え？」

驚愕のあまり頭が追いついてないアーサーの手に残ったのは柄の部分だけ。

その柄も砂のような細かい粒となって床に零れ落ちていく。

『ゲート：手加減してやるから耐えろよ？』

空気を読めない男が、また必殺技の構えをとった。

アイリーンが手を引っ張ってアーサーを退避させようとしたけれど間に合わない。

『ゲート：剣起――』

『３』

『ゲート：合格だ、お前らの勝ちだよ』

突然、ピシッと気を付けの体勢をとった男は満足げな表情を見せる。

『ゲート：俺は少し休むな』

そして、ゆっくりとうつ伏せに倒れた。

『卒業試練Ｔの目標を達成しました。クリアです』

チュートリアル終了

『卒業試練Ｔの目標を達成しました。クリアです』
天井のほうから女の人の声がした直後、床に大きな箱が八個現れた。
でもニールはその横を素通りして、アーサーの所へ駆け寄る。
「おれの伝説の剣が折れてサラッサラに……」
アーサーの精神的なダメージは深刻だった。涙をぽろぽろこぼして砂を濡らす。
アイリーンやニールがいくら慰めても、その涙はとめどなく溢れた。

「このままじゃ、やられるな。先にあいつを倒す――あれ？」
アイリーンの瞳に敵の姿は映らない。
アイリーンは、どこかに隠れているかも、とキョロキョロ探す。

「すまん……おいしいところもってったみたいなんだ」
それに気付いたニールは罪悪感いっぱいに罪の告白をする。怒られるのも覚悟の上だ。
けれどアイリーンは怒らなかった。すぐにアーサーのほうに向き直る。
「そっか。後でまた闘えるからいい。それより孝太だ」
タブーに堂々と触れるその表情は本当に心の底から心配しているものだった。

その気持ちはニールも同じだ。
――どうにかして元気付けないと。
しゃがんでいるニールは、正面から横顔が見える位置まで移動し

ようとしたその時、お尻になにかが刺さる感触がした。
手に取るとそれは剣の形をした武器のアイコン。

ニールの頭の中で、敵が持っていた武器とアーサーの大剣が重なる。

――もしかしてアーサーは、あの敵がドロップした武器を使っていたんじゃないのか？

確証はなかった。でもどう考えても他のドロップである確率の方が低い。

「アーサー、これ」

だからニールは思い切って差し出してみた。

……反応なし。動きがあるのは頬を伝う涙だけだ。

今度はアーサーのアイテムバッグに押し込んで「鞄の中を見てくれ」と、声をかけてみる。

しかし、かえってきたのはしゃくりだけだった。

そんな情けない姿を見ていたアイリーンの中に心配とは別の感情がわきあがってくる。

容量の少ない感情の箱はすぐにいっぱいになり、爆ぜた。

「いい加減にしろッ！」

手首のスナップを効かせた鋭いビンタをかます。痛みやダメージがなくともすごい衝撃だ。

思わず顔をあげて泣き面を晒すアーサーに向かって、引っぱたいてちょっとバツが悪そうにほっぺたをかきながら言葉を続ける。

「だいたいさ、武器一本でピーピー泣くなよ。また探せばいいじゃん」

「でも……初めて手に入れたレアアイテムっすよ？」

「鞄の中身を確認しろって」

ニールに促されて、アーサーは緩慢な動作で装備画面を開く。

「これは……」

涙に濡れた目が大きく開かれ、手の動きもなめらかに。

そして一つの大剣を出現させる。紛れもなくあの大剣だ。

そこですかさず、アイリーンは一つ問いかけた。

「三人で手に入れたその剣じゃ不満？」

目を真っ直ぐに見つめての質問。アーサーは即座に首を激しく横に振った。

「こっちのほうがいいっす」

嬉しそうに大剣を眺める目に偽りはない。

「よしっ、孝太！　初仕事だ！」

アイリーンが指差したのは八つの金属製ぽい灰色の箱だ。

「本名は秘密にしてくださいっすりゃあ！」

それを元気いっぱいにアーサーはたたき斬った。一度に三つの箱が壊れる。

続いての一発はゼロ。数秒待っての三撃目で三箱。

そして十秒ほど待機してから残った二箱を横に斬った。

――感触は抜群！

「……あれ？」

なのに壊れていなかった。二撃目のようにソードの攻撃制限に引っかかったわけではない。

それから何度攻撃しても、ニールやアイリーンも参加して撃ったり突いたり蹴ったり噛み付いたりしても箱は中身を守り続けた。

「もしかしてこれって、盗賊じゃないと開かない箱じゃないのか？」

疲れてはないがニールは諦めて座り込んだ。
「箱の色もちがうっすね」
「あぁ、ちょっと黒いな」
「つまりバグか」
アイリーンは納得したように頷く。

「それを言うならバグっす。おっ、はじめて見るアイテムが落ちてるっすよ」
アーサーが見つけ、拾い上げたのは杖の形をした武器アイコンと長靴の形をした防具アイコンだ。
それらは壊した六つの箱から出てきたもので、他の四アイテムは回復薬やＥＰだった。

「おれはソードで満足だから、これは二人で分けるっす」
「あたし靴なー」
アイリーンは遠慮することなくアーサーの手からサッと奪い、スッとバッグに入れ、シュッと装備した。
この靴にもグラフィックはついていない。だから足元はスニーカーのままだ。

「よーし、これでどうだ！」
アイリーンは軽くジャンプをして馴染み具合を確かめてから、開かずの箱に蹴りを叩き込む。
いつも通りなキレのある、いい一発。
……だからといって奇跡など起きず、箱は形を保っていた。

「おっし！」
けれど、アイリーンは喜んだ。自分のふとももをぱちぱち手で叩いて、よくやったとねぎらう。
「なんも変わってなくないか？」

「これが違うんだな。さっき蹴ったら壁みたいだった。でも、今はニールを蹴った時と同じ感触。つまり、パグが一つ直ったってことだ！」
アイリーンは言い切ると同時にニールを蹴っ飛ばした。
「ダメージでない。こっちのパグは直ってないか」
ちゃちゃを入れたことに対する罰ではなく、ただ確認のために。

「バグっすよね？」
パグと連発されたおかげでアーサーの自信は揺らいでいた。
「っと、それより、これはアニキの分すよ」
アーサーは気を取り直し、手の上に残っていた杖をニールに渡そうとする。

「……ありがとう」
あまり活躍してない上においしいところを持っていってしまったために、少しためらった。
けれど、差し出されているのは杖。二人とも使わないことは明らだったのでニールは受け取った。
――ミステッキか。俺が装備しても魔法は使えないだろうし、売ってしまえば……そういえば今のパーティは全員騎士だな。
バランスは最悪。総合するとつまりは、神官をやれと遠まわしに言っている？

チラリとアーサーを見ると目があった。
「どんなアイテムだったすか？」
「えっと、こんな杖だな」
なんの企みも感じられない目に、自分の考えを恥じつつ、すぐにミステッキを装備してみせた。
「うーん……」

アーサーが言葉に詰まる。ミステッキは先になにも付いてないオモチャのような杖だ。
――あー、杖がダサいから気を使ってるんだな。
感想に困るアーサーのためにニールは少し話題を変えた。
「そういえば、その剣ってレアリティはなんだ？　ナイフやハンドガンやミステッキは一番下の紫みたいだけど」
「あ、えっと、このソードはっすねぇ――紫。……あれ紫？　だ、騙しやがった！　あんにゃろう……」
突然、アーサーは怒り出し、この場にいない誰かに向かって文句を言い出す。
さすがにこれにはニールもついていけなかった。
――そっとしておこう。

ニールが落ちている回復薬――拾った途端に消えて一個ずつメンバーのバッグに入る――やＥＰを拾っていたら、
「そういえば」
「ん？」
開かずの箱をサンドバッグがわりにしていたアイリーンが足を止め、話しかけてきた。

「ニールってさ、影、薄いよね」
「うすい……？」
「うん、薄い」
アイリーンは屈託のない笑顔で頷く。
逆にそれがニールの心を大きく揺さぶった。

――ＶＲの世界でも空気だって！？　いやいや！　冷静になって空気な原因を探るんだ。
俺が空気なのはアイリーンとアーサーが目立っているから。逆に言えば、二人がすごく目立ってる。

特にアイリーンの騎士としての適正は半端じゃない。十段階評価でも余裕で十。百段階評価でも九十八は固いだろう。
アーサーも小さい体に制服を着せ、巨大な武器を使うことで、存在感を十二分にアピールしてる。
俺がこの二人に対抗して目立つには……

「今から神官になってくる！」
十秒もしないうちにニールは転職の決意を固めていた。
「アニキ待ってくださいっ」
すぐにログアウトしようとしたニールをアーサーが止める。
「あぁ、ミステッキを預けとくべきだよな」
システム画面から装備画面に切り替え、杖アイコンを取り出した。

「そうじゃなくて、転職なら街でＥＰを使ってできるっすよ？」
「……なるほど、途中で職を変えられるのか」
――もしかして名前も変えられた？　そうだとしたら悪いことしたな……。
ニールの心の中にまた一つ、罪悪感が増えた。

「で、街ってなに？」
アイリーンは新たに出てきたワードに目を輝かせていた。
「このチュートリアルをクリアしたら行けるようになる所っす。人がたくさんいるんすよ。次のログインも暗闇じゃなくてそこから始まるっす」
「へー、じゃあ早く行こう！　どうやって行く？」
「部屋の端っこに神秘転送が出現してるっすから――」
「あれだな！？　アイテムは全部拾い終えたよな？　行くよ！」
話を最後まで聞かずに、アイリーンは軽快に走り出した。
「早く来なって」

でも、今度は一人で先に行ったりはしなかった。二人の到着を待つ。
そして集合したところで号令をかけた。
「さ、天井の文字を読むよ。せーのっ」
「モロヘイヤ！」
意味不明な転送ワードを口にした三人の姿が真っ白な大部屋から消え、静かさが戻った。

『卒業試練Ｔは終了しました」
『青の【ニール】は１００のＥＰを獲得しました』
『青の【疾風のアイリーン】は１００のＥＰを獲得しました』
『青の【Ａｒｔｈｕｒ】は５０のＥＰを獲得しました』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0622y/

EP :VRMO

2011年11月5日22時17分発行